

協同学習を取り入れたチャット・ライティング

西川 恭

(兵庫県たつの市立龍野東中学校)

1. ライティング活動に協同学習の要素を

教室内の学習者一人ひとりがお互いの学びを支え合い高め合う存在であるという協同学習の理念を知ってから、これを自分の授業にも生かしたいと思うようになり、まずライティング活動について考えた。自分の授業実践の中で、最も取り組みの不足している分野だと自覚していたからだ。

中学生にとって、アルファベットに慣れ、文字と音との関係を理解しながら英語を書くということ自体大変難しいことだ。そのため「何度も書いて覚える」ことが英語学習の主な活動だと思いこんでいる生徒も少なくない。それは教師の責任であって、私自身も、基本的な文型や単語を覚えてから、その後で創造的なライティング活動に進むべきだと認識していた。自由英作文をさせても、内容よりも正確に誤りを指摘することに集中していた。しかし、当然ながら、これでは英語で書こうという意欲は生まれない。書くことが全く楽しくないのである。

そこで、心から書きたいと感じさせるために、協同学習の要素を取り入れられないかと考えた。そして、今井裕之先生のゼミの先輩方の研究を参考に、次の2点を組み入れた活動を実践した。

- ① 読み手を教師でなく、共に学ぶピアにする。
- ② 書く→読むという一方の活動で終わらず、数回のやり取りを続ける。

こうして、協同的学びを期待した、即興のライティングによるやり取り、いわゆる「チャット・ライティング」を実践した。

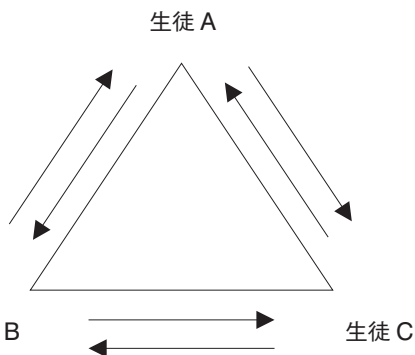
2. チャット・ライティングとは

活動は2年生の3学期後半に行った。生徒たち

は1年時より「1ページノート」と称する練習用ノートを持ち、1日1ページ「何でもいいから英語を書いて覚える」ことを課題としてきた。一方、クリエイティブなライティングは、ほぼ経験がなかった。

チャット・ライティングは、3人のグループで行い、パソコン上のチャットのような即興的なやり取りを、英語を書くことで行う。まず、1つのテーマについて、全員が自分の考えを書く。次に、下図のように、生徒Aは自分の書いたものを生徒Cに送ると同時に、生徒Bが書いた英語を受け取る。Aはそれを読んで感想やコメントを書き、Bに送り返す。同時に、Cからは自分の英語に対するコメントを受け取る。1回のターン（書く時間）は5分で区切り、最後まで書ききれていなくても次に進む。やり取りは1テーマにつき3往復行った。

<図>



<テーマ例>

1. If you can get one thing, what will you get?
2. If you can throw one thing away, what will you throw away?
3. If you can change one thing, what will you change?

3. 協同のためのリソースの重要性

一番苦心したのは、「何を書かせるか」というテーマの設定であった。習ったばかりの文法を必然的に使うようなテーマを出すことも可能であったが、今回の目的は新出文法の活用ではない。自分の考えをピアと交わし合うという目的のために、手段として英語を使うというように考えると、クラス全員がそれについて考え、書こうという意欲を持てるようなリソースの共有が必要であった。私は中嶋洋一先生がまとめて出版されている中学生の詩集を使うことにした。地道なご指導の賜物であると思うが、中学生の英語でこんなに素敵な詩が書けるのかと、自分自身が感動したのがきっかけである。詩集の作品をリソースとし、そこからテーマを設定した。

生徒は、同じ中学生が書いた詩を興味深そうに読んだ。そして、テーマについて一生懸命考える様子が見えた。後の感想に、「普段、日本語でも考えないことを英語で書いた」と記した生徒がいたが、短い時間の中で、彼らは一瞬自分の内面を覗いたのだと思う。実際に書かれた文は平易なものであっても、それはこれまでの文型練習とは全く違うプロセスを通して生み出されたものだ。

次に、これも多くの生徒が記していたことだが、「言いたいことは浮かんでくるのに、英単語が浮かばなくて困った」という感想が、活動の回数を重ねるたびに増えていった。最初は「とにかく英語は難しいから書けない」という声が多かったのだが、フラストレーションの中身が変化したのは、私にとっては非常にうれしい結果だった。

4. 協同の喜び

この活動の協同的な要素が生徒たちに与えた影響は、私の想像をはるかに超えて大きなものであったようだ。「人の考えを知ることができて楽しかった」「自分の英語が人に通じて嬉しかった」「初めて英語を使ったという感じがした」等々、ピアとのやり取りに対する喜びが生き生きと伝わってくる感想が多かった。英語を言語として使うとき、相手がネイティブ・スピーカーでなくても喜びには変わりがないのだということを改めて認識した。

よく議論されることだが、グループ活動をしたからといって、それが全て協同学習になっているとは言えない。今回の活動では、ピアとのやり取りが協同的交流を生むよう、「間違いを恐れずに表現する」とこと併せて「相手からより多くの意見を引き出すようなコメントを書く」ように生徒たちを励ました。相手の考えに耳を傾け、意見を引き出そうとする意識を持たせたかったからだ。実際、尋ねられたことにうまく答えたいという気持ちが生まれたことは、あとのリフレクションでも明らかだった。限られた時間の中、慣れない活動に四苦八苦しながらも、相手のことを知りたい、自分の考えを伝えたいという思いが、活動の底で作用したように感じた。

拙い表現ながら相手を励ましたり気遣ったりする言葉の使用が見られたのも、ピア間のやり取りならではのであった。あるやり取りでは、“I have a bad memory about my club.” に対して “Why? You like swimming, don't you?” と返し、それに対して「頑張っても友達のように速く泳げない…」と伝えようとする例があった。また、英語が得意でいつも明るい生徒が “I want to change weak myself.” とつぶやき、英語嫌いの相手生徒が “I think you study very hard! It's beautiful & wonderful!” (原文ママ) と答えている。普段はほとんど言葉も交わさない生徒間のやり取りである。ピアの存在がコミュニケーションへの意欲を高め、言語的にも多くのチャレンジを生んだことは大きな効果であった。これをきっかけに、まとまった量の文章を書くリレーノートやピア・ライティングに発展できたらと思う。

佐藤学(2000)は「基礎的な知識や技能は、それが基礎的であればあるだけ、経験をとおして機能的に学ばれる」と述べているが、この考えは特に accuracy が重視されがちなライティング指導に取り入れるべきではないだろうか。正確に書く活動と、創造性や内容の充実を目指す活動を分け、バランスを取る必要があると思う。後者の実践では、ピアの存在を生かす工夫を今後も続けていきたい。

【参考文献】

佐藤学(2000)『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店。
中嶋洋一ほか(2006)『フィフティーン ― 中学生の英詩が教えてくれること』ベネッセコーポレーション。